

68

内科学教科書の結核病因についての記述の変遷：  
ベルツの『内科病論』を中心に

渡部 幹夫

順天堂大学

明治維新後の医学教育制度史についての研究の蓄積は多い。しかし、疾病構造の変化が起こっていた日本の近現代社会において、臨床医学教育がどのように行われていたかその内容についての研究は多くない。近現代日本における結核の問題をひとつの主題として、内科学の教科書の記載の変化を見た。

ベルツの『内科病論』は1883年（明治16年，来日7年後）にベルツ著，榎村清徳校閲，伊勢錠五郎譯補として上，中，下巻が版行された。伊勢錠五郎は，初版の例言で「ベルツ氏ノ本科学生ニ講述スルノ際與フルトコロノメモラントムヲ補譯シ各病ノ要点ニ就テ頗ル簡約ニ論述セル」と述べている。1889年第5版の緒言では「内科学進歩ノ成績ハ成ルヘク充分ニ之ヲ網羅シテ各当該ノ篇章ヲ改刷シ」としている。

コッホによる結核菌の発見により，結核症の感染症として研究が始まったのは1882年である。肺癆，急性粟粒結核は中巻の呼吸器病の中に記載されている。初版では「此病ハ乾酪変性及ビ化膿ニ陥ルノ質ヲ具フル炎症ノ為メニ肺質漸次頽敗ニ傾ク者ヲ謂ウ其病機多クハ特異ニシテ粟粒結核ニ同シ但シ真ノ急性粟粒結核ハ全ク別種ノ病タリ〔原因〕肺癆ハ固ト遺伝ニ属スル者ニシテ血族盡ク此病ニ由リテ於滅スルニ至ルコトアリ男女ニ就イテハ大差ナシ素ト此肺癆ハ一定程度ノ觸接傳染性ヲ有スルモノナリ心臟病，癌腫，肺気腫等ノ症ニオイテハ此病ヲ発スルコト太タマレナリ〔治則〕予防及一般ノ保健法ヲ努メ其素因アルモノニハ幼児ヨリ適良ノ生育ヲ要ス」「急性粟粒結核 是レ急性熱性病ニシテ其確徴ハ乾酪様物ヲ吸取シテ諸器官ニ無数ノ粟粒結核ヲ沈着スルモノナリ」としている。第5版では「夫レ肺癆ナル者ハ洋ノ東西ヲ問フス最モ多ク見ル所ノ病（人民殆ント七分ノ一ハ結核ニ由テ死亡ス）ニシテ近時ノ検査ニ抛レハ觸接傳染性傳染毒ニ基因ス〔原因〕肺癆ノ病毒ハコッフ氏ノ結核バチルスニシテ従前ハ此病ヲ以テ遺傳性ノ疾患ト為セリ〔治則〕予防ニハソノ傳染性甚タ危険ナラズト雖モ宜シク漫ニ患者ニ近接スルヲ戒慎セシムヘシ」「急性粟粒結核是レ急性熱性病ニシテ其確徴ハ結核バチルスヲ含有スル乾酪様（結核性）物ヲ吸取シテ諸器官殊ニ肺臟ニ無数ノ粟粒結核ヲ沈着スルモノナリ」とある。『内科病論』の後続教科書と考えられる『鼈氏内科学』はベルツ原著，馬島永徳・本堂恒二郎・土岐文二郎共譯として1893年初版が出されている。1903年の第六版では「肺癆・肺結核」として「定義 本症ハ漸々發生シ炎症産物ノ化膿性分解ニヨリ多クハ年餘ニ持積スル肺組織ノ壞潰ニシテ其起炎原因ハ所謂結核桿菌ナリ而シテ多臓器ニモ亦屢々同一ノ病症ヲ発スルモノトス」「結核桿菌ハ體外ヨリ體内ニ襲来シ此處ニ傳染ヲ呈スルモノナルハ明白ナリト雖モイカニシテ体内ニ侵入セルヤハ未ダ不明ニ属ス」としている。

日本語の内科学教科書の肺癆・結核について記載は次のように変わってきた。1876年桑田衡平訳述の『華氏内科摘要』には「肺癆ハ通例遺傳ノ病ニシテ」とある。1881年長谷川泰纂略『内科要略』では「結核ハ遺伝ニ起コリ或ル血族ニ於イテハ結核ノ為メニ全ク死亡スルコトマデアリ」としている。1890年寺尾国平編『内科類症鑑別』では「固有徴ヲ呈シ遺傳體質等ヲ有シ加エ痰中ニ結核バチルレン及肺弾力纖維等ヲ検出スルトキハ其診断容易ニ且ツ確実ナリ」としている。1934年入沢達吉の『内科読本』では「本病は人類の全死亡数の約七分ノ一を占める。他の疾病で死亡した患者でも解剖の際検すると九十%以上は嘗て罹患しすでに治癒せし陳舊結核竈を證明せしむるから之を持たない者の方は變な人間であるといいたい」「従来結核は遺傳するものと考えたのは，家族傳染による」としている。日本の内科学教科書における結核の記載について医学教育史から考察する。

資料は国立国会図書館，静岡県立中央図書館葵文庫，順天堂大学山崎文庫による。